

ガンを善知識として

—ある女性の生還とその信仰生活



千石 真理

京都大学このこの未来セミナー上巣特定研究員

医学博士・浄土真宗本願寺派僧侶

成功した精神科医であるが、私も大切な人たちの死に向かう姿や、ビハーラやホスピス、緩和病棟で出会う患者さんたちとの関わりにおいて、同じように感じてきた。

フルに生きる、とはどういうことであろうか。そもそも、死亡率は百パーセント。つまり、必ず死ぬべき存在である私が、今、ここに生きているのはどういう意味があるのであろうか。私たちがガンである、あるいは余命を宣告された時、どのように生き方ができるのであろうか：

死に向かう時に考えさせられるのが、エリザベス・キューブラー・ロースの「死の床にある人たちが教えてくれたレッスン」のひとつは、人は死にかかる、という時代である。自分自身や身近な人がガンに罹患する、というのはそう珍しいことではなくなった。早期発見、治療で十分生存できる場合もあるが、ガンと聞いて生命のリスクを考えない人はいないだろう。

しかし、ガンに限らず、大切な人が死に向かう時に考えさせられるのが、エリザベス・キューブラー・ロースの「死の床にある人たちが教えてくれたレッスン」のひとつは、人は死にかかる、という時代である。自分自身や身近な人がガンに罹患する、というのはそう珍しいことではなくなった。早期発見、治療で十分生存できる場合もあるが、ガンと聞いて生命のリスクを考えない人はいないだろう。

堤さんとの出会い

今や、日本人の二人に一人がガンにかかる、という時代である。自分自身や身近な人がガンに罹患する、というのはそう珍しいことではなくなった。早期発見、治療で十分生存できる場合もあるが、ガンと聞いて生命のリスクを考えない人はいないだろう。

しかし、ガンに限らず、大切な人

が死に向かう時に考えさせられるのが、エリザベス・キューブラー・ロースの「死の床にある人たちが教えてくれたレッスン」のひとつは、人は死にかかる、という時代である。自分自身や身近な人がガンに罹患する、というのはそう珍しいことではなくなった。早期発見、治療で十分生存できる場合もあるが、ガンと聞いて生命のリスクを考えない人はいないだろう。

堤さんとの出会い

堤さんのお顔を拝見した時、彼女の深いご縁をご教示下さったのだ。堤さんのお顔を拝見した時、彼女の深いご縁をご教示下さったのだ。

十九年にあの吉永小百合が、映画「愛と死を見つめて」という映画でヒロイン「ミコ」を演じ話題となり、不治の病として知られるようになつた悪性のガンだ。当時に比べ、格段に進歩した現代の医療においてさえ、百万人に一人の罹患率で五年生存率は三十パーセント弱。抗ガン剤も、放射線治療も効果がなく、外科切除手術しか方法がない。堤さんは「顔が半分無くなる」と宣告された。

顔が半分無くなるという現実を、一体、誰が受け入れられようか。堤さんは、信じがたい、耐え難い現実の中で暗く深い奈落の底に突き落とされた恐怖しか感じなかつた。彼女は、ただただ、仏壇の前に座つて、朝から晩まで、「正信念仏偈」、「仏説阿弥陀経」、「御文章」を繰り返し、称え続けるしかなかつ

るまでの生き方が彼女の存命に繋がっているのではないか、という点に着目した。

病気にかかってしまった時、身体の症状だけでなく、心や精神も一緒に全人的に治療してゆく大切さと、人はガンなどの病気や、人生の一大事に出会った時にこそ、靈性が磨かれ大切なことに目覚めるチャンスがあることを論じたい。

堤静香さんとの出会いは、立正大学セカンドステージ大学に合格し、その修了論文『親鸞』考察』を書き上げられた。そこに綴られたご自身の壮絶な経験と、その後の親鸞聖人の足跡を辿った、茨城県稲田の西念寺への旅を含む信仰生活の論文を

二〇〇四年、三月十一日、東京在住の当時五十二歳であった堤さんは、築地のがんセンター中央病院で「頭頸部の骨肉腫」と宣告された。

堤静香さんとの出会いは、立正大学セカンドステージ大学に合格し、その修了論文『親鸞』考察』を書き上げられた。そこに綴られたご自身の壮絶な経験と、その後の親鸞聖人の足跡を辿った、茨城県稲田の西念寺への旅を含む信仰生活の論文を

二〇〇四年、三月十一日、東京在住の当時五十二歳であった堤さんは、築地のがんセンター中央病院で「頭頸部の骨肉腫」と宣告された。

堤静香さんとの出会いは、立正大学セカンドステージ大学に合格し、その修了論文『親鸞』考察』を書き上げられた。そこに綴られたご自身の壮絶な経験と、その後の親鸞聖人の足跡を辿った、茨城県稲田の西念寺への旅を含む信仰生活の論文を

○絶望と奇跡

十九年にあの吉永小百合が、映画「愛と死を見つめて」という映画でヒロイン「ミコ」を演じ話題となり、不治の病として知られるようになつた悪性のガンだ。当時に比べ、格段に進歩した現代の医療においてさえ、百万人に一人の罹患率で五年生存率は三十パーセント弱。抗ガン剤も、放射線治療も効果がなく、外科切除手術しか方法がない。堤さんは「顔が半分無くなる」と宣告された。

顔が半分無くなるという現実を、一体、誰が受け入れられようか。堤さんは、信じがたい、耐え難い現実の中で暗く深い奈落の底に突き落とされた恐怖しか感じなかつた。彼女は、ただただ、仏壇の前に座つて、朝から晩まで、「正信念仏偈」、「仏説阿弥陀経」、「御文章」を繰り返し、称え続けるしかなかつ

た。他のことなど考へる余裕は一切なく、真っ黒い闇の中、死と向き合った極限の状況の中で、淨土真宗のお経の世界に身を投じている時だけが、恐怖を感じなくてすむのであつたという。

十日ほどたつたある朝、驚いたことに、仏壇や自分の周りが、まばゆい金色の光で輝いていた。それと同時に、誰かに抱きかかえられているようだ。身体が軽くなつたのを感じた。何か自分以外の大きな力が確実に働いているのを実感し、次第に心が軽くなつていったともいわれる。

いよいよ外科手術のための入院が三日後と迫る夕方。すっかり気持ちが落ち着き、手術を抵抗なく受け入れられるようになつて、いた堤さんは、自宅で愛犬とくつろいでいた。そこに、勤務先の夫から、「必ず見



堤静香さん(右側)と筆者

が、堤さんに残された手段はなかつた。こうして彼女は、七〇・四グレイの線量を十六回に分けて照射され、二ヶ月の入院生活を送つた。

現在では、堤さんをはじめ、この療法に果敢にチャレンジした患者の方々の臨床データがあるからこそ、照射時間も短くなり副作用もなるかに軽減された重粒子線治療を、より多くの人が受けられるようになつ

た。しかし、当時の堤さんの場合は、医療チームも手探り状態で治療を進める状態であった。照射後、二ヶ月で激痛が訪れモルヒネなどの痛み止めが全く効かない状態であつた。

錠剤三百二十錠に換算される、皮膚から吸収される麻薬系の貼り薬を開発されたばかりであつたが、そのおかげで、ようやく痛みが取れ日常生活を取り戻すことができるようになつた。他に重粒子線治療の後遺症の対処としては、照射のために口腔内にできた腐った骨を除去する外科手術が必要であった。

堤さんは、現在も二ヶ月に一度、彼女の治療プロジェクトチームの東京歯科大学の口腔外科と放医研で再発予防の検査を受け

た。しかし、当時の堤さんの場合は、医療チームも手探り状態で治療を進められた。照射後、二ヶ月で激痛が訪れモルヒネなどの痛み止めが全く効かない状態であつた。

ている。彼女の努力と、医療チームの手厚い看護のお蔭で、堤さんは頭部の骨肉腫患者の中では世界で第一号、顔が現存のまま八年間再発せずに日常生活を送り、生存記録を更新し続けている。

ガンを宣告されて以来、無我夢中で治療を受けてきたが、三年経つた頃堤さんの心に自分の人生を振り返り、今後の生き方を問うという、余裕が生まれてきた。そんな中よき出逢いが起こる。「愛と死を見つめて」の著者、河野實氏の講演に招かれ、「マコ」に対面したのだ。マコさんは、壮絶な青春を駆け抜けた歳月の後、突然「ミコ」と同じ骨肉腫に罹患した堤さんが目の前に現れたのを、「身の毛がよだつた」と表現された。そして、何度も、「本当に顔がありますね。信じられない！」

てくれた」と、ファックスが送られてきた。それは、「重粒子線、ガンの深部にピンポイント」という見出しの新聞記事。重粒子線は炭素イオンを加速器を使って、ピンポイントでガンに照射するので、骨のガンにも有効である、といった内容であつた。

その記事を読んだ瞬間、堤さんは自分でも気づかない直感に導かれ、千葉県稻毛市にある「放射線医学総合研究所」に電話をしていた。通称「放医研」の門を叩くには、かかりつけで、ガン治療の権威であるがんセンターの紹介状が必要であった。新聞記事を読んで放医研に問い合わせたのが木曜日の夕方。土曜日、日曜日の病院の休診日を挟んで、次の月曜日が外科手術のため、がんセンターに入院予定の日であった。

重粒子線によるガン治療は、今は多くの人が知る先進医療であるが、堤さんが出会つた八年前は世界でもドイツと日本にしか存在せず、しかも機器が稼働して治療が受けられるのは千葉県の「放医研」のみで、過去の臨床結果では、五名の骨肉腫患者に効果がなく、堤さんは今までにない高い放射線量七〇・四グレイを顔面に施せば、成功するのではないか、という予測に立つた治療であった。ぞつとするような賭けともいえる治療であった。

2012・12 大法輪 | 190

と語つたという。それ以降、堤さんは河野氏と交流している。二人とも、壮絶な経験を通して行き着いたのは、親鸞に対する思いであった。福田の西念寺を訪れることを奨励してくれたのも、他ならぬ「マコ」である。

堤さんは、ガンの恐ろしさ故に真宗のお経に没頭する中で、何か自分以外の大きな存在の力が働いているのを、強く感じる経験をしている。まさに、その力に「おまかせ」の境地に至った時に、症例のなかつた重粒子線治療に奇跡としかいようのない出会いをした。堤さんは、この時の心境を、「まるで親鸞の説く本願力、阿弥陀如来に身を任せよと、光が私の行く未知なる道をサ一ツと照らし出した瞬間だったように思う。親鸞も六角堂における百日の

しての使命だと私は思う。
そんな堤さんの心境や生活の変化の中でも、ことさら私が彼女に伺いたいと思っていたことがあった。お坊さんでもない一般の方が、死への恐怖心からとはいえ、お仏壇の前で一心不乱にお経を読むことによつて、心の平安を得たいと感じ行動するのではなく大抵のことはない。常日頃からの習慣があつてこそ初めてできることではないのか、ということであった。

やはり、堤さんのおばあ様も、昨年九十一歳で亡くなられたお母様も、熱心な浄土真宗の門徒であったとのことだった。結婚後、お母様と二十六年間同居している間、毎日お経をあげる大切さと、一緒にお寺参りをする習慣を身につけた、ということであった。それでも、ガンだと

参籠において、聖徳太子（救世觀音）の夢告という不思議な体験をしたことが、彼の生涯を変える師、法然との出逢いに繋がり、その後の親鸞の骨格に繋がつていったのだと思いを巡らせるようになつた」と、『『親鸞』考察』で述べている。

○今をフルに生きる

親鸞の足跡を辿りつつ、自身の体験を振り返るようになった堤さんは、「人は生きているのだろうか」生かされているのではあるまいか」と強く感じるようになつていった。発病する前は、平和な毎日を送るのが当たり前だと思つていた。けれど、そんな保障はどこにもない。だからこそ、生かされている今の一瞬一瞬を大切に、悔いなく生きていこうと思うようになつた。生かされて

いる、という思いは、お世話になつた人たちへの恩返しと、社会貢献をしようという決意へと繋がる。

堤さんは、現在も治療後の後遺症を乗り越えるための弛まぬ努力と、感染症を避けるための健康維持に留意しながら、日本対がん協会会長・垣添忠生先生の推進する『ガン啓発活動』の一員として、講演活動などを通して重粒子線治療の啓発、普及に奔走している。それと共にボランティアで、ガンなどの病気に罹患し絶望感や焦燥感にさいなまれている人々の傾聴活動を行つている。

ガンを宣告された恐怖や、生死をかけた治療に専念してきた彼女だからこそ、多くの患者さんの痛みに、我がことのように共感でき、癒しや勇気を与えられるのだ。堤さんの現在の活動は、如来より賜つた菩薩と

宣告される前の読經と宣告後の読經では、「今、ここ」に感謝して、我が身をおまかせして生きているという境地においては、大きな違いがあると、彼女は話してくれる。

堤さんは、重粒子線治療の啓発講演の際に、「最後まで諦めないと、勇気を持つてチャレンジして！」と訴えておられる。それは、命のある今、ガンの宣告や治療を通してこそ、気づけるものがある。それには、命ある今しっかりと教えに遇いなさい、と仏は説く。

僧侶として、チャプレンとして、たくさんの方の死に立ち会わせていただいた私も、自分の死の瞬間を現実のこととして心から受け止めることはできないし、恐怖心もある。しかし、私の見解としては、死を宣告された時の心の衝撃や悲しみは宗教的価値観がなければ、本当に乗り越えることができないのでないのではないか、ということだ。

かつて私が担当していたうつ病の患者さんが、「うつは神様からのプレゼントだった。うつになつて初めて

気づかされたことがある」といつて、病気を克服されたが、ガンという自分の生命と、心に極限的に向き合わざるをえない状況を経験してこそ、気づかされることがあるのだろう。

私たちを真実の教えに導いてくれる人のことを、善知識と呼び、親鸞聖人は、この善知識に出会うことは容易ではない、といわれている。眞実の教えに出会う、導かれる、というのは、よくよくの縁があつてのことであるし、教えに導いてくれるの自分が自分にとつて尊敬できる人とは、決して限らない。

お釈迦様が法敵、提婆達多を捕まえたというが、人間というのは、憎い相手を自らの鏡として映しだして初めて、自分と向き合うことができるのでかもしれない。たとえそれが、自分の生命を脅かすガンであつたと

しても。

堤さんに問うてみた。「あなたにとつて、ガンは善知識ですか?」彼女は、涼やかに微笑んで「その通りです」と答えてくれた。ガンを自分の生命を蝕む恐怖の対象として、戦々恐々と毎日を生きるか。それとも、広く深い潜在意識に入り、全ての生命の根源的存在に抱かれていることに目覚めさせてくれる善知識として、手を合わせるか。どちらを選ぶかは、その人次第だが、その選択によって「今、ここ」の生き方が大きく変わることは確かである。

「明日ありと思ふ心の仇桜、夜半に嵐の、吹かぬものかは」(親鸞)堤静香さんは、この歌の心境で、毎日をフルに生きておられる。ガンフルに生きることができる」というキユーブラー・ロス博士の言葉に、私は親鸞の、特に葬儀の時に読まれる和讃を重ね合わせる。「本願力にあいねればむなしくすぐるひとぞな

き 功徳の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」……ガンを治したい、死にたくない、家族に告知しない。これは、我々煩惱を持つ人間が思つて当然のことである。けれど、煩惱を通して突きつけられる自己と向きあう時こそ、阿弥陀如来の本願に気づかされる瞬間であり、煩惱を抱えたまま、如来の大悲の海に自分の生も死も、まかせられる生命が目覚める機縁なのである。

「明日ありと思ふ心の仇桜、夜半に嵐の、吹かぬものかは」(親鸞)堤静香さんは、この歌の心境で、毎日をフルに生きておられる。ガンなどの病氣と闘っている人、生きるのが辛いと苦しんでいる人がいる。そんな人々にこそ、この境地で生きる素晴らしさを伝えていくのが、我々僧侶の役目であると、私は思う。